

ワケ カタチには理由がある(74)

～ノースロップXP-56



[↑N-1M 全翼実験機と／
翼形状の共通性が感じられる]



ジャック・ノースロップ(1891-1981)は、ダグラス社ではSBD ドーントレスなどの基礎設計にかかわった天才設計者ですが、独立して自らの会社を起こしたのち、P-61 ブラックウィドー、F-5A/E、T-38 など数多くの傑作機を世に出しました。「ネズ爺&ハテナヤンの特許探偵団 vol.43」で取り上げたように、その人生で彼が大きな力を注いだのが、機体を翼だけで形成する全翼機でした。N-1M といった実験全翼機を試作中、米国陸軍は1939年、プロペラを後方に配置した推進型の非従来型戦闘機のコンペ(R-40C)が開催され、ノースロップはこのXP-56で応募し、最終的に実機審査された3機のうちの1機に選ばれました。二重反転プロペラを有し、正面からみると翼をM字型に折り曲げるなど、全翼機特有の操作困難性を克服するよう腐心しましたが、実際に飛行させると直進安定性で苦勞し、速度や機動力についてもプロペラを前方に配置した従来型戦闘機に及ばず、他の2機種とともに正式採用はされませんでした。実用化されなかったといっても、その外観は極めて独創性に富み、ある意味、とてもカッコよく、個人的に大好きな機体です(もっとも、実際に飛行した機体は、より大きな垂直尾翼が取り付けられていて、外観は大きく異なります)。

【模型について】

チェコのMPM製1/72の古い簡易インジェクションキットです。ベーシックな凹モールドで、翼の迎え角の変化もちゃんと再現されていて、佳作キットです。同社は、このキットのバリエーションとして、大きな垂直尾翼が取り付けられ、翼端にラムジェットが付いた、改造後の機体もリリースしていました。(中川裕幸 2021年5月)